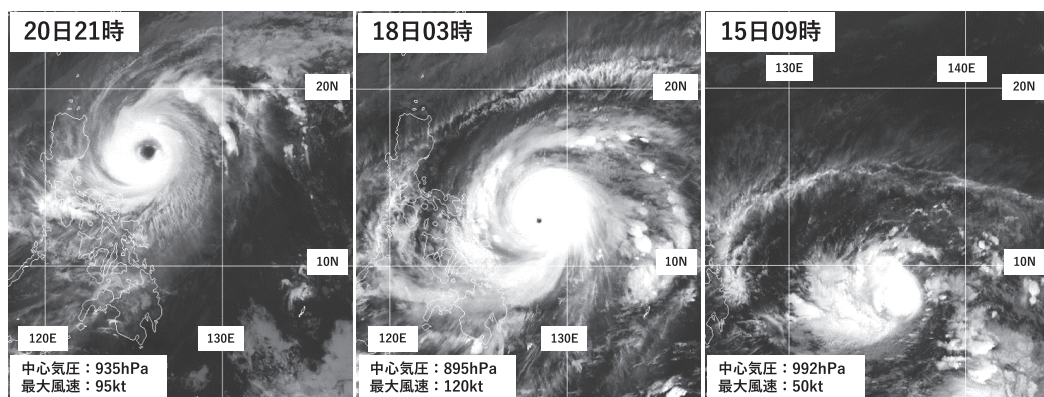




今月のひまわり画像—2021年4月

4月に中心気圧900hPa以下まで発達した台風第2号



第1図 2021年4月15日09時～20日21時（日本時間）の66時間毎のフィリピンの東海上付近における台風第2号の赤外画像。

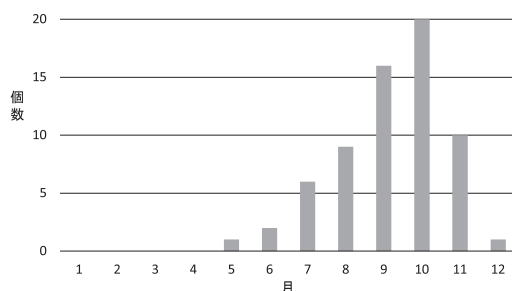
第1図は2021年4月15日09時～20日21時（日本時間）の66時間毎のフィリピンの東海上付近における台風第2号の赤外画像である（以下、台風についての記録は速報値）。14日03時にカロリン諸島で発生した台風第2号は中上層の亜熱帯高気圧の南縁における発達に適した環境（高い海面水温及び海洋貯熱量，弱い鉛直シアーなど）の中を西寄りに進んだ。発生当初はコンパクトな台風であったが，16日03時頃から曲率を持ったバンド状を呈し，周辺のCbクラスターが急速に台風の中心付近に集中し始めた。その後，中心付近の濃密な雲域は円形度を増しながら拡大し，17日03時頃からピンで突き刺したような眼が明瞭となった。濃密な雲域がさらに拡大するのに伴い，中心気圧は17日21時までの24時間で60hPa降下し，18日03時に中心気圧895hPa，最大風速120kt（1kt≒0.51m/s）と解析された。この時刻，濃密な雲域の雲頂温度は -90°C 以下（高度約17kmに相当）にまで低下していた。

発達のピークを過ぎた後の台風第2号の中心付近における変化も興味深く，最初は二重眼の様相を呈していたが，18日15時頃から眼を取り巻くバンド構造が明瞭となった。一般に，猛烈な強さにまで発達した台風は最盛期を過ぎると眼が大きくなる。第2号においても20日21時頃から直径約60kmの大きな眼がはっきりと確認できるようになった。また，18日09時頃から台

風の移動速度は落ちていたが，衛星画像を動画で見ると，同心円の構造が崩れている時間帯には楕円が回転するかのよう中心が左右に大きくぶれていた。

台風ベストトラックのデータベースによると，1951年～2020年の過去70年間に中心気圧が900hPa以下となった台風は65個である。月別に見ると，8～11月が圧倒的に多く，全体の約8割を占めている（第2図）。最早は1971年の第5号で，5月2日に中心気圧890hPaが記録されている。今回の第2号はこの最早記録を塗り替え，1951年以降，シーズンオフの1～4月に中心気圧が900hPa以下にまで発達した初めての台風となった。

（気象庁大気海洋部予報課 木下 仁）



第2図 中心気圧が900hPa以下となった台風の月別の個数（各台風のピーク時刻を集計）。